



街の 灯り 物語

灯り——それは

そこに暮らしがある証

さまざまな心模様が描かれ

物語が紡がれている証

迎えてくれる灯り

見送ってくれる灯り

そして見守ってくれる灯り

街それぞれに灯りがあり

人それぞれに

心に残る灯りがある

その一つの物語



光と影、表と裏の顔を演出する 石原 興 映画監督・カメラマン

仕 事人が仕事をするときの冷たい表情を独特の陰影で彩る——『必殺シリーズ』の映像は「光と影のコントラスト」が印象的だと言われるが、それは狙ってやったわけではなく、さまざまな制約をクリアするための工夫の産物だった。

制約の一つはサイズの問題。映画に比べテレビの画面は小さいため、ワンシーンで隅々まで表現しても視聴者は理解できない。シンボリックに見せないと伝わらない。だから例えば灯り一つで夜のシーンであることを伝える。時間と場所の制約も大きかった。『必殺』の初期の頃、撮影は放送日の二日前。天候を待つていられないのでセットを組む。しかも松竹のオープンセットは古く、同じセットを何度も使い回すので、ライトのあて方で変化をつける以外なかった。もしもより条件のいい撮影所で撮っていたら、あの映像は生まれていなかったかもしれない。

さらに言えば、『必殺』の仕事人たちには表の顔と裏の顔がある。これをどう表現するか。もちろん芸達者な役者揃い、二つの顔を演じ分ける力は十分にある。しかしより強調するために辿り着いたのが光と影の演出。いわばライティングとカメラワークは、役者という素材の良さを引き立てる「調理法」なのだ。

こうした表現を考えるようになった原点は、私がまだ撮影助手だった頃、二つの印象的なシーンに出くわしたこと。一つは縄を投げるシーンで、漆黒の闇の中を白い縄がシュルシュルとまるで生き物のように軌跡を描いて飛んでいくシーン。もう一つは何十枚もの銀のレフ板にライトをあて水面がキラキラ輝くさまを撮ったとき。こんな撮り方があるんだと印象深かった。

三十七年前、私はカメラマンとして『必殺』第一作から参加した。まずは構図を決め、照明演出、ライティングによってシーンの雰囲気を描き出す。ライトのあて方を変え、ライトの種類も変える。フィラメントの光は滲んだ光、影をシャープに出すならアークライト。いろいろこだわりながら「絵」をつくってきた。

ドラマづくりは伝統工芸ではない。『必殺仕事人2009』でも、難しく考えず、遊び心で、常に新しい演出を試み、心躍る映像を届けたいと思っている。 **躍**



いしはら しげる 映画監督・カメラマン
1940年京都府生まれ。日本大学芸術学部中退。松竹京都撮影所の名カメラマンとして撮影における「絵」にこだわり続けた仕事人。1972年からの人気テレビドラマ『必殺シリーズ』では斬新なカメラワークで『必殺』の世界観を築く。シリーズ後期からは監督として携わり、『必殺仕事人2009』でもメガホンを取っている。
<http://hissatsu2009.asahi.co.jp/>